書　評

三葉虫の謎－「進化の目撃者」の驚くべき生態

リチャード・フォーティ著，垂水雄二訳

早川書房，2002，342pp.，2400円

日本ではあまり産出が知られていないが，もしひとたび，複雑で美しい形をした三葉虫を掌中にしたら，その魅力に引かれていくだろうことは想像に難くない．著者は14歳で三葉虫のとりこになり，もう30年以上研究を続けているロンドン自然史博物館の主任研究員フォーティである．本書はFortey, Richard, 2000, Trilobite! Eyewitness to Evolutionの翻訳である．三葉虫の魅力に満ち満ちている本書の目次は以下のようになっている．

はじめに
１章　発見－三葉虫との遭遇
２章　殻－四億年前のタイムカプセル
３章　脚－奇跡の化石が浮かび上がらせた実像
４章　結晶の眼－常識をくつがえす高度の視覚
５章　爆発する三葉虫－生物の多様性をめぐる大騒動
６章　博物館－化石研究の舞台裏
７章　生死にかかわる問題－断続平衡説と悲劇の古生物学者
８章　ありうべき世界－三葉虫が教える太古の地球
９章　時間－科学における時間の意味
10章　見るための眼－科学者のイメージ
謝辞，原注，もっと知りたい人のための読書案内，人名索引

三葉虫研究の歴史は，オックスフォード大学アシュモレアン博物館のキュレーターであったルイド博士が1698年に「カレイ」として記載したのに始まるという．本書冒頭に「カレイ」の写真が載っている．そして第２章から三葉虫についてわかりやすい説明とそしてフォーティの研究史が始まる．なるほど300年以上の研究に応え，そして将来的にも魅力的な研究材料である．あるいは，私は絶妙なフォーティの語り口にすっかりまいってしまったのだろうか．

第１章の書き出しは蜘蛛の巣亭の酒場から始まる．まるで小説のようである．著者の素養の高さがにじみ出てくる．ところどころにトマス・ハーディの小説『青い眼』が引用されている．不幸にもこの小説の日本語訳は簡単に手に入らない．第１章にはこれから展開される主題がみんな入っているのだが，難解である．だから，第１章は１番最後に残しておいてよいから，どうぞ，次の章に読み進んでほしい．

本書は三葉虫に関することは何でも書いてある．殻形態（2章）も，肢構造の研究史（3章）も，眼のない三葉虫（4章）も，カンブリア紀初期の「爆発」に関する大論争（5章）も，博物館での研究の様子（6章）も，断続平衡説（7章）も，ゴンドワナ大陸（8章）も，発生（9章）も，そして，古生物学へのオマージュ（10章）も．すべて三葉虫の眼で見つめ，考えている．

三葉虫は自然物だけれど，取り扱うのは人間である．だから研究のまわりにはとても人間くさい問題が生ずる．グールドとコンウェイ・モリスの争いも，このフォーティの解釈・仲裁あたり（5章）が１番いいのだろうと私は思う．素晴らしい研究の途中で突然消えてしまったのは，ナチスドイツに虐殺されたためという哀しいカウフマンの物語（7章）や地位と名誉に狂ってインドシナで化石を捏造したデプラト事件（9章）にも三葉虫は出会っていく（現在デプラトの名誉は回復されつつある）．

自らが手がけたタクサをフォーティのように，時に熱を込めて，時に淡々と書けたらどんなにいいだろうか．フォーティのもう一冊の著書『ライフ－40億年の生命史』も近々翻訳が出版される予定とのことである．楽しみにしている．

矢島道子（東京成徳学園）

学術集会参加報告

第４回 IGCP434国際シンポジウム（ハバロフスク）報告

IGCP434「白亜紀の炭素循環と生物多様性の変動」（代表　平野弘道）の第４回国際シンポジウム（Cretaceous Continental Margin of East Asia : Stratigraphy, Sedimentation, and Tectonics）の講演会がハバロフスクで，また地質巡検がアムール川沿いに，2001年9月3日～12日に開催された．

講演会の参加者は6ヶ国54名および招待者18名の総計72名で，参加者の内訳は，日本23名，韓国7名，フィリピン2名，タイ2名，ベトナム2名，ロシア18名であった．また巡検には6ヶ国42名が参加した．

シンポジウムの講演会は3・4両日にわたって，科学アカデミーのテクトニクス・地球物理研究所に近いハバロフスク地区行政府のビルで開催され，25件の口頭発表と17件のポスターセッションが行われた．シンポジウムIのTectonics and Geodynamicsでは，アムール川沿いのジュラ紀に形成された付加体の構成と構造，日本とSikhote-Alinの付加コンプレックスの対比，ジュラ紀付加体形成後のアジア東縁での左横ずれ運動，サハリン南部の白亜紀-古第三紀の付加テクトニクス，フィリピン・オフィオライトの時空分布，九州の白亜系中部赤色層の古地磁気学的位置などに関する研究発表が行われた．シンポジウムIIのPaleontology and Stratigraphyでは，Shatsky Riseの白亜紀前期放散虫，アムール川下流域のジュラ紀に形成された付加体と白亜紀に形成された前弧海盆堆積物の放散虫年代，フィリピンの白亜紀-古第三紀境界，北海道白亜系上部層の炭素同位体層序，黒瀬川帯のジュラ紀-白亜紀境界の二枚貝フォーナ，タイの白亜系層序，韓国南部の白亜紀恐竜足跡の分布と産状などに関する研究発表が行われた．シンポジウムIIIのSedimentology, Geochemistry of Isotopesでは，東北日本の白亜系上部浅海堆積物に見られる海進-海退サイクル，手取層群PAHsの古環境学的意義，タイ北東部の白亜系下部Khok Kruat層の堆積学的検討，アムール川沿い白亜系砂岩の組成と後背地，韓国Gongju Basinの堆積相解析と火成活動，韓国慶尚盆地白亜系下部層の地球化学的・岩石学的な後背地解析，慶尚盆地白亜系下部層産ストロマトライトからの湖沼環境と生物多様性の解析，炭素・酸素同位体比によるコニアシアン期の古気温に関する研究発表が行われた．

今回は，開催地との関連や，日本からの参加者が約半数を占めたこともあり，アムール川沿いに分布するジュラ紀・先ジュラ紀に形成された付加体や白亜紀に形成された前弧海盆堆積物と日本に分布する関連堆積物との対比に関する発表が多く見られた．とくに2002年６月には，日本古生物学会と当プロジェクトとの共催・（NPO法人）福井恐竜博物館後援会後援で，手取層群に関する国際シンポジウム”環日本海地域における白亜系層序と国際対比 -手取層群を中心として-”が開催されたこともあり，全体討論では，前弧海盆堆積相と付加体に関する話題が集中した．付加体の区分についての基準は，日本の研究者の間でも多様であること，また付加体の区分単元の用語については必ずしも統一見解が見られるわけではないことが報告された．また付加体の区分にあたっては，岩類構成，海洋プレート層序，付加年代，配列上の構造的位置が判別要素となることや，形成史の重要性が議論された．構造的位置に関しては，付加体形成後とくに白亜紀前期後半以降の横ずれ断層運動による変位を考慮する必要があることが論じられた．

アムール川（図１）沿いの巡検は，以下の日程で開催された．

９月5日，ハバロフスク郊外のVoronezh地区とアムール川シベリア鉄道橋付近で，放散虫産出地点（Bragin : 1991,1992 ; Kojima *et al*., 1991 ; Zyabrev & Matsuoka, 1999など）を含めて，ハバロフスク・コンプレックスの岩相を見学．記念撮影（図２）．９月6日，Petropavlovsky 湖付近の白亜紀前期に形成された前弧海盆堆積物とKnyaze-Volkonsky地区の採石場跡でValanginianのタービダイトを見学（図３）．９月7日，ハバロフスク郊外の Malyshevo 地区で，下部白亜系の前弧海盆および背弧海盆堆積物を見学の後，Sikachi-Alyan地区のNanai族の資料館とアムール川沿いの玄武岩に刻まれた石器時代の線刻遺跡を訪問．９月8日，水中翼船でKomsomolsk-on-Amurへ移動．市内を見学．９月9日，アムール川右岸のコムソモルスク・セクションのジュラ紀に形成された付加コンプレックスと白亜紀前期に形成された前弧海盆堆積物を見学．海洋プレート層序とメランジュ，J-K境界付近の二枚貝フォーナを観察．９月10日，アムール川右岸のPivan-Portからコムソモルスク・セクションの白亜紀前期に形成された前弧海盆堆積物を中心に見学．ハンモック斜交層理をはじめとする浅海相の堆積構造が層序的に連続して観察できるセクションであった．９月11日，Khummi湖の白亜紀に形成された背弧海盆堆積物を見学の後，バスでハバロフスクへ移動．９月12日，散会，帰国．

現在ハバロフスク郊外には，第二次世界大戦の戦没者記念公園が日ロ共同で整備されており，主催者のG. L. Kirillova教授のはからいで，巡検の初日に訪問することができた．またコムソモルスクの市街は大戦直後に，日本人抑留者による都市建設が行われた場所でもあり，筆者らは，巡検の合間にK. Lyudmila女史の案内で，抑留者のキャンプ地跡を訪問したほか，郊外にある無名墓地のうち２カ所に墓参することができた．

図１．ハバロフスク上空より見たアムール川．

図２．第４回IGCP434シンポジウム巡検の参加者による記念撮影．アムール川シベリア鉄道橋とハバロフスク・コンプレックスを背景に．

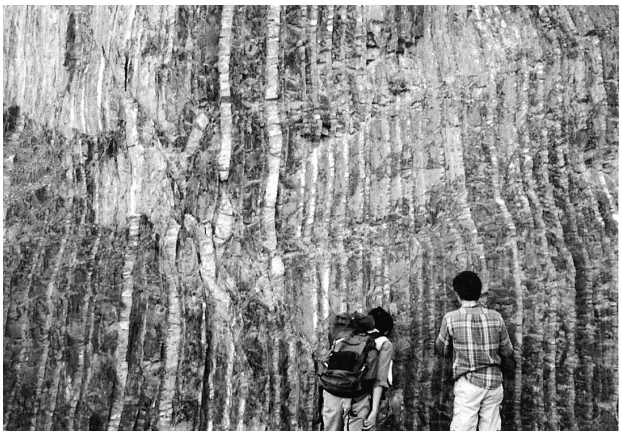

図３．Valanginian 前弧海盆堆積物のタービダイト，Knyaze-Volkonsky地区の採石場跡にて．

今回の巡検では，アムール川流域に分布する各種の白亜系堆積相と生物相ならびに，関連するジュラ紀付加体を集中的に見学することができた．詳細な露頭の案内のために，数年前から計画されたものと伺う．筆者らも準備段階で，坂井　卓博士（日本連絡委員　九州大学），太田　亨（早稲田大学）・石田直人（九州大学）両君と共に，多少なりともお手伝いできたことはIGCP434ならではの経験でもあり，G. L. Kirillova 教授をはじめとして，シンポジウムと巡検の開催にあたられた関係各位に厚くお礼申し上げます．

今回のシンポジウムは，IGCP434プロジェクト４年目であり，これまでの東京（早稲田大学），ミャンマー（ヤンゴン大学），中国・チベット（ラサ）に続く開催であった．次回の第５回シンポジウムは，タイ（バンコク）で2003年に開催予定と決定している．

シンポジウムの要旨集 (Program and Abstracts of The IV-th International Symposium of IGCP434, "Cretaceous Continental Margin of East Asia: Stratigraphy, Sedimentation, and Tectonics", Khabarovsk, 127p.)，ならびに巡検案内書 (G.L. Kirillova et al. (eds.) "Upper Jurassic-Cretaceous Deposits of East Asian Continental Margin along the Amur River", Khabarovsk, 71p.) が印刷されている．資料ならびに当シンポジウムの詳細については，IGCP434代表（早稲田大学　平野弘道教授）あるいはロシア連絡委員（ロシア科学アカデミーハバロフスク極東支局，G.L. Kirillova教授，e-mail: kirillova@itig.as.khb.ru）におたずね下さい．

石田啓祐（徳島大学）・香西　武（鳴門教育大学）

学術集会情報

The 16th International Symposium on Environmental Biogeochemistry（ISEB-16）のおしらせ

このシンポジウムは土壌および地殻における地球化学的過程をグローバルな視点から学際的に研究することをめざし，微生物学，土壌学，陸水学，地質学，鉱物学，古生物学，環境生物化学など多分野の研究者の交流の場として開かれてきた．1973年以来，２年に１回南北アメリカ，ヨーロッパ各地で開かれてきた．第16回シンポジ

ウムはアジアでははじめての会議となる．
　ひとつのメイン会場で８トピックスについて招待講演，口頭発表が順次行われる．別の会場でポスター発表が行われる．夜は多種類のワークショップが開かれ交流を進める．

ISEB16国内組織委員会：赤井純治（鉱物），遠藤一佳（古生物），服部黎子（微生物生態），服部勉*（土壌微生物），犬伏和之（土壌微生物），加藤憲二（地球微生物），北島富美雄（地球化学），南澤究（微生物生態），長沼毅（地球微生物），若尾紀夫（微生物生態），矢木修身（環境工学），吉田聡（地球化学）：＊委員長

主要テーマ：　Biogeochemical Shaping of the Earth System : Past, Present and Future
トピックス：
a)　Interaction between microbes and minerals
b)　Microbial habitats and biofilms
c)　Biogeochemical processes in terrestrial environments
d)　Biogeochemical processes in aquatic environments
e)　Biogeochemical processes in bioremediation of polluted and disturbed environments (including biogeochemical processes of radionuclides)
f)　Methods for researching biogeochemical processes
g)　Global perspective and frontiers
h)　Weathering processes in historical monuments (including weathering of ancient soil)
開 催 日：2003年９月1日～6日
開催場所：青森県十和田湖町　奥入瀬渓流グランドホテル
参 加 費：一般31,000円，学生15,000円，同伴者12,000円
ホームページ：http : //www.iseb16.com/
連 絡 先：〒980-0813　仙台市青葉区米ガ袋1-6-2-401　服部 勉
（Email：atic-tr@dd.iij4u.or.jp）

遠藤一佳（筑波大学）

「有孔虫研究会」が発足しました．ぜひ登録を！

2002年9月の日本地質学会の夜間小集会で，日本産新生代有孔虫の模式標本データベース構築に向けて，分類学的問題の整理と今後の研究方針についての話し合いがありました．その際，主要種群の分類学的検討やデーターベースの構築を目的とする研究会が，院生のレベルアップに役立つのみならず，初めて有孔虫を研究する人にとっても有用であることが確認されました．また，IODP の推進にとっても，このような趣旨の研究会が重要であるという意見も出され，出席者間で，会の必要性に関する意識の一致が見られました．そこで有志による協議を行った結果，このほど有孔虫研究に関する連絡会として「有孔虫研究会」を発足させることになりました．
　研究会は，当面，1)「使えるデーターベース」の作成，2) 有孔虫の分類と，それにもとづく種々の研究成果を議論できる場を提供，3) 有孔虫ユーザーや勉強を始める学生が参加し易い環境作り，などを目標としています．そのため，年２回程度の勉強会を開催し，ニュースレター『Forams-Net』を発行します．とくに『Forams-Net』は，有孔虫に関わる情報交換の場として，おもに分類上の問題・悩みごと相談，文献の紹介，画像データーベースへの要望等々のほか，有孔虫に興味を持つ人からの寄稿により，さらに広範囲に及ぶ話題について気楽に話し合える“井戸端会議場”としての役割も果たすでしょう．
　多くの方に，この「有孔虫研究会」への参加を呼びかけています．とくに，現役はもちろん，研究手段として過去に有孔虫を用いた皆様には，お近くで有孔虫に興味を持っている大学院および学部の学生諸君を誘って参加されるようお願いします．お問い合せおよび参加登録は下記の有孔虫研究会事務局まで．
　なお，第1回勉強会は2003年３月３日（月）～５日（水）に，熊本大学で開催します．詳細は，今後発行する『Forams-Net』no. 2に掲載します．また，研究会に興味をお持ちの方には創刊号をお送りします．下記の事務局までご連絡ください．

有孔虫研究会事務局（代表：長谷川四郎）
住所　〒860-8555　熊本市黒髪2-39-1　熊本大学理学部地球科学科気付
電話　096-342-3421（長谷川四郎）または096-342-3426（秋元和實）
ファックス　096-342-3426（秋元和實）
電子メール：info@foram.jp（有孔虫研究会事務局）

参加登録には，上記のいずれかに，・氏名，・所属（身分，学年），・連絡先住所，・電話番号，・電子メールアドレス，・メッセージ（「参加希望」および要望等）をお知らせ下さい．

秋元和實（熊本大学）

化石友の会

「化石友の会」は，古生物学研究者の底辺を広げようという趣旨のもとにつくられた「研究者というほど専門的ではないが，化石に興味・関心をお持ちの方々」を対象とした日本古生物学会の中にある団体です．
　本会会員の方々は，以下のサービスを受けることができます．
①　日本古生物学会発刊の和文機関誌「化石」（年２回，９月，３月発刊）の送付．
②　日本古生物学会の年会（６月下旬開催）・例会（１月下旬開催）のご案内［友の会会員には，参加費（含，講演予稿集代）の割引があります］．
③　年会・例会に参加できない方のための講演予稿集予約販売．
④　古生物学に関するご質問およびご相談の受け付け．
⑤　野外巡検などのイベントのご紹介．
　本年度は，５月26日に「地層と化石の観察会3」と題して奥多摩地方で古生代の石灰岩中の化石（フズリナなど）の採取・観察（国立科学博物館との共催）を，また８月４日～６日（２泊３日）に美濃帯の見学および石灰岩・チャート層に含まれる化石の採集などを中心とした野外研修（財団法人　自然史科学研究所との共催）を実施いたしました．その他，県立・市立博物館などの企画展・特別展のご案内などをしております．

年会費（４月１日～翌年３月31日）：3,000円

正会員とのちがいは，欧文機関誌「PaleontologicalResearch」が送付されないこと，評議員の選挙権・被選挙権がないことおよび総会への参加ができないことです．ただし，年会・例会へは参加できます．その他の点では，正会員とほとんど変わりありません．本会への入会資格はとくに定めておりませんので，会員の中には化石が大好きな中学生・高校生（ただし，機関誌などでは中学生・高校生向けの言葉づかいをしているわけではないので，少し難しいかも知れません）から，退職後，専門的な研究から遠ざかっても古生物学会からは離れがたいとのことで，正会員を退会し，友の会会員に移られた方までさまざまな方がおられます．また，正会員と共著で論文を発表されている方もおられます．
　友の会会員の方で，正会員になることを希望される方の学会への推薦も行っております．すでに多くの方が正会員として承認されています．入会の受付は随時行っておりますので，入会を希望される方がおられましたら，住所（郵便物等の送付先）および氏名を明記の上，下記宛てはがき・ＦＡＸなどでご連絡下さい．また，退会を希望される方も同様にご連絡下さい．諸事情で退会された方の再入会も可能です．

〒171-0033　豊島区高田3-14-24
（財）自然史科学研究所，日本古生物学会「化石友の会」
FAX：03-5992-9154
e-mail：inst-nat-hist@mte.biglobe.ne.jp

今後，このコーナーを利用して，友の会の方々からの声を掲載していきたいと思っていますので，ご意見・ご希望などお寄せください．

大花民子（自然史科学研究所）

行事予定

◎2003年年会総会は，静岡大学理学部で2003年6月27日(金)～6月29日(日)に開催予定です．シンポジウム「生物多様性を古生物学から考える：世話人　塚越　哲・北村晃寿・生形貴男」が半日程度の日程で開催されます．講演申し込み締め切りは，2003年5月2日（金）です．この年会総会で夜間小集会やワークショップ開催の予定があれば早めに行事係りまでお知らせ下さい．

◎153回例会は，熊本県天草郡御所浦町の御所浦白亜紀資料館（田代正之館長)が中心になって，御所浦町開発総合センター等を会場に2004年1月に開催予定です．この例会では目下科研費「研究成果公開促進(B)」を申請しており，6月に採択された場合は，田代正之館長の普及講演会「天草の構造運動とそれに伴う化石群集と環境変遷」(1月25日(土)午前中に御所浦町開発総合センター）を開催予定です．またシンポジウム「干潟の自然，その過去と現在」（世話人：佐藤慎一・小松俊文・廣瀬浩司）を1月26日（土）午後に開催予定です．

◎個人講演の申し込みは予稿原稿を下記まで直接お送り下さい．E-mailやファックスでの申し込みは原則として受け付けておりません．また行事全般に関するお問い合わせも行事係りか行事係幹事までお寄せください．

〒305-8571　つくば市天王台1-1-1
筑波大学地球科学系
小笠原　憲四郎（行事係）
Tel : 029-853-4302（直通）　Fax : 029-851-9764
ogasawar@arsia.geo.tsukuba.ac.jp
本山　功（行事係幹事）
Tel : 029-853-4212 or 4465（実験室）
isaomoto@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

学会記事

日本古生物学会（2001・2002年度）第4回評議員会議事録

日時：2002年1月23日（木）　13：30～17：15
場所：横浜国立大学　教育文化ホール　中会議室
出席：平野会長，安達，安藤，天野，後藤，池谷，加瀬，北里，近藤，前田，間嶋，真鍋，野田，小笠原，岡田，大路，小澤，瀬戸口，棚部
欠席：小泉（→北里），森（→大路），西（→間嶋），冨田（→加瀬），植村（→真鍋），八尾（→安達）
書記：庶務幹事（川辺）

報告事項

常務委員会報告（真鍋）

庶務：①第7回化石及び現生渦鞭毛藻類に関する国際会議，国際地質環境ワークショップ，光記念館（岐阜県高山市）企画展「魚竜・魚類展」－古代の海を制した動物たち－，神奈川県立生命の星・地球博物館特別展「ザ・シャーク．サメの進化と適応・ケースコレクションより」への後援依頼，科学技術振興事業団のGBIF技術専門委員会（地球規模生物多様性情報機構（GBIF）の国内対応組織）HPと当学会HPとのリンクを了承した．②平成15年度「笹川科学研究助成」募集，東京大学大学院理学系研究科・地球生命圏科学講座助手公募，日本学術会議主催公開講演会「先端科学技術と法－進歩・安全・権利－」，日本学術会議・日本科学技術ジャーナリスト会議共同主催シンポジウム「科学と社会―いま科学者とジャーナリストが問われている－」，第13回シンポジウム「地球社会とアジアの未来」，平成15年度三菱財団自然科学研究助成の募集をHPで周知した．③科研費・研究成果公開促進費（公開 B）の公募要領，第19期日本学術会議会員の選出に係わる学術研究団体の登録申請結果及び関連研究連絡委員会の指定回答，日本学術会議の在り方に関する説明会資料集，第19期日本学術会議会員推薦手続きの延期通知，2003年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」推薦依頼，平成14年度第33回三菱財団自然科学研究助成採択報告，秋吉台科学博物館報告第37号，御所浦白亜紀資料館報第3号，高知大学創立50周年記念事業「深海3572mに生きる－室戸沖南海トラフ４年間の記録」（ドキュメンタリービデオ：第43回科学技術映像祭内閣総理大臣賞等受賞作品），月刊地球2002年６月号「古海洋学の最近の進展と古生物学」，東京学芸大学紀要（数学・自然科学）第54集，地質標本館絵はがき「海洋プレートと放散虫化石」・絵はがきセット，日本地質学会より新会長同新副会長の通知，石油資源開発株式会社より新役員の通知を受領した．④IPC の際開催された IPA の Business Meeting で日本古生物学会が団体会員として認識されていなかったが，これはIPA側の記録の誤りで当会は団体会員であることがIPA事務局によって確認された．⑤第2回将来計画委員会を横浜例会中の１月25日午前に行う．

渉外：①国立情報学研究所による電子図書館の情報サービスに，ＰＲと化石の電子化を依頼した．②日本学術振興会主催の研究成果公開促進費（定期刊行物）の申請に関する説明会に出席した．申請内容に学会の会計的な側面よりも出版物の内容に関する記述が増える（例えば，従来のインパクトファクターなどに加え，過去５年間の主要論文の概要とその引用件数など）．③研究成果公開促進費（定期刊行物）の申請書を日本学術振興会に提出．平成15年度130万円，平成16年度135万円，平成17年度140万円，平成18年度145万円の申請．④地質科学総合研連にオブザーバーとして出席（11月5日）．その後地質学関連学協会連合の懇談会となる．科学技術総合会議の提案した学術会議の改革案に対するパブリックコメントに学会として賛同することを表明．

会計：①2002年度年会・総会（福井県立恐竜博物館）の収支を報告した．有料参加者は317名（正会員157名，学生会員67名，友の会会員８名，非会員85名）だった．会場における収入は1,034,150円，支出は189,090円，収支は845,060円だった．②住所不明の個人会員のリスト（2002年９月18日現在）を回覧し，常務委員が分担して学会事務センターに現住所を連絡した．③2003年度 PR 誌海外機関向け購読料，US$75（現状維持）を確認した．④第１回将来計画委員会（2002年６月22日）が開催され，学会の支出軽減化のため，論文賞のメダルは筆頭著者だけにする案，年会例会のプログラムをインターネットからダウンロード化する案などが提案された．今後常務委員会で議論を続けていくこととなった．

会員：①海外会員確保のため，経済的に困難な会員へのスポンサー制度の導入の可能性について，会員係等が運用面について学会事務センターと検討することとした．②2003・2004年度評議員選挙のために，被選挙人名簿を作成した．

行事：①152回例会は横浜国立大学（教育文化ホール）にて，2003年1月24日（金）～26日（日）の３日間で開催する．会場アルバイト，

諸雑費など，通常の開催補助費に113,000円の追加補助を了承した．なお，24日（金）のシンポジウムの会場費は海洋科学技術センターが負担する．②科研費「研究成果公開促進 (B)」を会長名で申請．「天草の構造運動とそれに伴う化石群集と環境変遷（田代正之館長の普及講演）」，2004年１月25日，10：30～12：00，御所浦町開発総合センター（申請額1,170千円）．③北九州市立自然史・歴史博物館より新館オープンに伴う学会開催希望の申し出があった．

国際交流：①PRのISI登録申請の具体的作業を進めるため，斎木健一氏を国際交流係幹事として委嘱した．②アジアなど近隣諸国の古生物学の現状に関して情報を収集中である．

広報：①学会HPへのアクセス数は順調で，現在46,000件を超えている．②ＨＰへ寄せられる質問は，出版物購入に関係するものが多い．③古生物学の進学ガイドの一環として，学会HPと全国の地球科学系教室HPとのリンクを進めることを確認した．

友の会：ニュートン１月号に入会案内を掲載した．会員数減少（現在会員数100名程）を鑑み，今後の友の会の在り方を将来計画委員会などで検討することとした．

学校科目「地学」関連学会連絡協議会：平成18年度の教科書全面改訂に際し，教科書の内容・在り方についての議論が盛んになっている．

会員の入退会報告（安藤）

前回の評議委員会以降，23名の入会（御前明洋，柿崎喜宏，畠田健太朗，筑紫健一，藤野滋弘，三好克幸，佐藤　崇，豊福高志，東島沙弥佳，廣瀬陽二郎，二宮　崇，木下勝幸，松尾昭宏，河村博之，清家一馬，福地　亮，黒柳あずみ，川幡穂高，崔　桂林，奥原嗣雄，越前谷宏紀，長谷川精，渡辺　剛），８名の退会（野口秀常，真田千夏，堀口敏秋，ZAKHERA, Mohamed. S.，今村忠彦，中村真仁，松木裕人，崔　桂林），２名の逝去（宮内敏哉，森田寛一）があった．2003年１月23日現在，総会員数1145名（普通国内754，特別329，名誉13，賛助７，普通海外42），欧文誌購読13名である．

編集状況報告

欧文誌（棚部）：①Paleontological Research（以下PR）vol. 6, no. 4号は印刷中である．vol. 6は総計400頁と例年より大部なものとなる．これに伴い，作業量が2割程度増加したLanguage Editorへの校閲料を約 US$500程度増額することを了承した．②PR vol. 7, no 1（Special issue：第17回国際生物学賞記念シンポジウムのProceedings）の編集が順調に進んでいる．vol. 7, no. 1の表紙をspecial issueの内容を反映させたデザインにする．通常は1300部印刷しているが，今回は数百部程度増刷し，単巻でも販売する．③2003年１月23日現在33編の論文原稿を受け付けている（受理８，修正中14，査読中11）．

化石（間嶋）：①72号を出版した．②73号の出版を準備中で，横浜例会中の１月25日午前に編集委員会を開く．

特別号（冨田；小笠原代）：①化石タイプ標本データベースPart 2（特別号40号）を発行した．②化石タイプ標本データベースPart 3は2002年11月中旬に初稿受付を締め切った．10分類群（珪藻，貝形虫，ジュラ紀アンモナイト類，三畳紀とジュラ紀二枚貝類，白亜紀二枚貝類，ヒザラガイ類と類縁分類群，中生代腕足類，三葉虫，昆虫，脊椎動物）約3,500件のデータを収録し，印刷頁360頁，530部印刷，販売価格4,300円で古生物学会特別号41号として刊行計画．見積総額130万円，助成申請額82万円（申請者　小笠原）．2003年７月１日入稿，2003年12月25日出版の予定である．③Part3の編集は18期研連としての最終事業であり，出来るだけ未収録分類群を少なくするために，該当分類群の担当者に最終確認書を発送した (12月３日)．④従来，科博，東大などに分散していたバックナンバーを，科博分館で一括管理することとした．

学術会議・研連報告

古生物研連（北里）：①総合科学技術会議「学術会議の在り方に関する専門調査委員会」の中間まとめと専門調査会案の概要が紹介された．②2003年の通常国会に日本学術会議法の改正法案が提出される予定である．ただし継続審議等となった際は，第19期学術会議がスタートする．③博物館が科研費申請資格機関として認定されるためには，設置の目的に「研究」が謳われていることが重要であることが明らかになった．

地質学研連（前田）：博物館学芸員科研費申請資格の条件が，緩やかに運用される見込みである．

自然史学会連合（植村；真鍋代）：①総会（12月７日：科博分館）開かれ，今年度の活動報告と来年度の活動方針が示された．連合HP (http://www. soc. nii. ac. jp/ujsnh/) 参照．②来年度は地域博物館アクションプラン，自然史教育アクションプランを継続すること，さらに，連合設立の当初の目的であった，自然史研究機関設立についての立案アクションを継続することが承認され，それぞれに作業部会を設置することとなった．③連合のHPが一新された．連合加盟の学協会，自然史関連分野のニュースを集め，利用価値を高めたいので，古生物学会員にも協力をお願いしたい．④12月７日，連合第8回シンポジウム「極域の生物学―フィールドサイエンスの最前線」を科博分館講堂で開催した．当会会員では北里　洋氏が「地下にひろがる生物圏」と題する講演を行い，盛況であった．⑤来年度は連合シンポジウム「予測の自然史科学―未知と未来へのアプローチ」を開催予定で，科研費公開促進費を申請中．なお，科研費が採択された場合，2003年４月以降に連合加盟学協会との共催シンポジウムを開催する希望があれば，その財政的援助が可能である（ただし１件程度）．

審議事項

平成16年度学術振興会科研費配分審査委員候補の選出

「層位・古生物学」一段審査委員の候補として１位江崎洋一君，２位延原尊美君，３位大野照文君，４位近藤康生君，５位西田治文君，６位西　弘嗣君，７位森田利仁君を，「地質学」一段審査委員の候補として１位指田勝男君を，「地球化学」一段審査委員の候補として海保邦夫君を選出した．分科「地球科学」二段審査委員の候補として，１位北里　洋君，２位加瀬友喜君を選出した．以上の候補者を日本学術会議古生物研究連絡委員会に順位をつけて推薦することとした．

行事案

①第153回例会は2004年１月24日（土），25日（日）に御所浦白亜紀資料館が，御所浦町開発総合センター等（熊本県天草町御所浦町）を会場に開催することを承認した．②2003年年会のシンポジウム案「生物多様性を古生物学から考える：世話人，塚越　哲・北村晃寿・生形貴男」を承認した．

化石タイプ標本データベースの産総研Wedへの掲載について

日本古生物学会が著作権を保有することを条件に，特別号39号に掲載されたデータを産総研研究情報公開データベース (RIO-DB) に掲載することを承認した．

日本学術会議第19期の会員，推薦人の推薦

日本学術会議第19期の会員の候補者として斎藤常正君に依頼することとした．その推薦人は現会長（予備者は前会長）とする．

学会賞選考委員について

学会賞選考委員会は加瀬友喜君，北里　洋君，松岡　篤君，八尾昭君と会長で構成する案が示され，これを承認した．

以上

投稿者へお願い

投稿に際しては以下の点に注意して原稿を作成し，投稿をお願い致します．

１．これまで見出しの付け方に統一性がありませんでした．そこで，以下のように統一致します．
１）第一項目
　従来どおり，**ゴシック**体にして中央に配置する．
２）第二項目
　左寄せで**ゴシック**体にする
３）第三項目
　番号（１．）でつづけるが，**ゴシック**にも*イタリック*にもしない．左寄せ．
４）第四項目
　英文字小文字（a.）でつづけるが，**ゴシック**にも*イタリック*にもしない．左寄せ．
５）第５項目以降は任意に行う．但し，左寄せ．
以下のようになります．

はじめに

浮遊性有孔虫

1. 化石層序

a. 群集組成

２．図のキャプションに英文を付ける場合は，Figureではなくて Fig. を使って下さい．

３．３名以上の著者がある論文の本文やキャプションへの引用は，邦語論文の場合は，横山ほか，2003として下さい．また，欧文論文の場合はYokoyama *et al*., 2003とし，「*et al*.」は斜体指定して下さい．

４．受理後にお送り頂く電子ファイルは必ず全てのファイルを含むようにして下さい．作図ソフトで作ったファイルも同封して下さい．ファイルから直接図の版下を作った方がきれいに印刷されるようです．Macにしかないソフトで原稿を作成した場合は，テキストファイルも一緒に送って下さい．業者に入稿する前に書式をそろえる作業を編集委員が電子ファイルに直接行っています．なお，電子ファイルをフロッピーでお送り頂く場合は，Windowsマシンで読めるフォーマットにして頂けると助かります．

５．海外で行われた学術集会の報告が増えていますが，これらは，記事原稿として扱いますので，ポイントが落とされて印刷されます（今号から実施）．また，写真は全て一カラムの幅（一段の幅）で印刷します．原稿の性質上特例は認めませんことをご了承下さい．また，記事原稿の写真や図は数枚に留めるようにして下さい．

６．会員が興味を持てるような内容で，学術上意味があるものなら投稿区分にこだわらずに原稿を受け付けます．ふるって御投稿下さい．

（化石編集委員会）

編集委員会より

新装なった「化石」誌はいかがでしょうか？　前号（72号）の表紙のインパクトが強烈だったこともあり，賛否両論あるようですが，編集委員会としてはまずます成功だったのではないかと判断しております．さて，今号から「編集委員会より」というタイトルでいわゆる「編集後記」を最後に付けることにしました．編集委員が入替わりで読書の皆様にお伝えしたいことを書いていく予定です．今回は間嶋と矢島が担当します．

編集委員会最大の課題は原稿不足です．編集が終わった段階で次号の原稿がほとんど無いという自転車操業状態です．特にカラー口絵の原稿は編集委員が用意しなくてはならない状況です．実にもったいない気がします．カラー表紙も毎号変えますので，化石に係わるものなら内容にこだわらずに採用していく方針ですので（と言いつつ，化石の見事な産状写真が良いと思っています^^;），良い写真をお持ちの方は編集委員に一度相談して見て下さい．「表紙を毎号変える」と言ったとき一部の会員から，「ネタがすぐに底をつくから止めたほうがいい」という意見をお聞きしました．しかし，およそ自然物を扱う古生物学で表紙にするネタが無いなどという事態は由々しきことで，絶対あってはならないと考えています．

公立の研究・教育機関は，最近の競争奨励と産業優先の風潮（新自由主義と“えせナショナリズム”に基づく構造改悪，いや構造改革とでもいうのでしょうか？）もあってなかなか大変なことになってきました．研究の質よりもむしろ論文の数や短絡的な研究の応用性が問われる流れの中で「古生物学」や自然史科学の各分野が生き残っていくのは容易ではない気がしています．先日の常務委員会の折に大路樹生さんから最近旗揚げした分類学連合のニュースレターを見せてもらいました．その１号に掲載されていた“会員寄稿　設立記念シンポジウム「これからの分類学」を聴いてーあるまじめな分類屋の感想”はこうした問題を考える上で強烈なメッセージを与えているように思います．ニュースレターの第１号は分類学連合のホームページ（http : //www. bunrui. info/NL/NL01/index. html）で見ることができます．

（間嶋隆一）

『化石』誌第１号は1960年９月発行である．発刊の辞は小林貞一会長が書いている．学会創立25周年を記念して，「..... この有意義な講演や討論に接したいのは独り例会や年会に出席した人々のみではありません．広く会員諸君の切望されるところであります．しかし，会誌と欧文の Special Papers だけでは不充分でありまして，その他に邦文の特別出版物の必要に迫られてきました.....」と発刊の推移が書かれている．紡錘虫に関するシンポジウムの報告を中心にまとめられた A5版で90ページほどの小さな出版物であった．編集長は今号の論壇を書かれた高柳洋吉氏であった．

さて，それから43年，発刊の意志はうまく継続しているであろうか，より発展しているであろうか．できれば，これから43年後の編集委員にふりかえってもらってプラスの評価をえたいものである．

（矢島道子）